ペスタロッチー教育賞
受賞者紹介

学校法人　九里学園 学園長
九　里　茂　三　氏

九里茂三氏は、1921年山形県米沢市に生まれ、東京高等師範学校を卒業、海軍兵学校教官として終戦を迎えた。1945年から米沢興穣館中学校(現・高等学校)教諭として勤務し、1956年学校法人九里学園理事長に就任、1961年米沢興穣館高等学校教諭の職を辞し、九里学園米沢女子高等学校（現・九里学園高等学校）校長となった。1979年に九里幼稚園を創立、園長となり、1982年には九里学園教育研究所を設立、1990年からは学校法人九里学園学園長として活躍されている。その間、山形県私立高等学校協会会長、日本私立中学高等学校連合会副会長等の要職を歴任されてきた。

九里氏の業績の第一は、その半世紀以上にわたる学校教師としての実践活動にある。戦後の混乱の中で国語を担当し、ガリ版刷り教材を使って情熱的に生徒たちに語りかけた青年教師時代から、校長を務めながらクラス授業を担当し生徒の一人ひとりを温かいまなざしで見守っていた近年まで、その真摯な教育実践活動は、上杉鷹山、細井平洲の伝統を受け継ぐ米沢教育の成果として、高く評価されている。

九里氏の業績の第二は、私学教育・経営に関するものである。氏は養母、九里とみ氏が1901年女性の自律めざして創立した九里裁縫女学校を引き継ぎ、その精神を発展させるとともに、「礼－人間の尊厳を重んじその高貴さにふさわしく行為しよう」並びに「譲－自らの持てる力を発揮して愛する世の人々に捧げよう」を理念とした私学教育を行ってきた。氏は、自らの出発点を「徹底して私学的であること」とし、自由な発想のもとに考えうる最善の教育内容とその体制を樹立し、生徒一人ひとりを大切にすること、さらにそこに一瞬の停滞も許されないことを訴えつづけてきた。このような氏の姿勢は、九里学園の独自な教育プログラム、芸術やスポーツ、生徒たちの自主活動を中心にした優れた教育実践として展開されている。

また関連して、国際交流や地域社会文化の発展についても、氏は顕著な教育的文化的功績を挙げている。私学のあり方をめぐる国際的な研究活動としては、歴史的に著名なドイツの田園教育舎ショーンドルフ校やアメリカの姉妹校セントジョーンズベリー校との交流が例示されよう。さらに九里学園教育研究所は、教育研究施設、地域に開かれた小劇場としての役割とともに、1982年以来機関誌『あづまね』を刊行し、教育課題の研究や啓発、地域文化芸術の発掘・紹介、さらにコミュニティ活動発信の場として高く評価されている。

九里茂三氏は、ペスタロッチーがそうであったように、自らの教育理念を自らの学園において実践し、学園の教育と経営に粉骨砕身してきた。九里氏の活動は、戦後から現在にいたるまで一貫しており、教育への情熱と子どもたちへの愛情に基づいた真摯な実践が、いま豊かな実りを結び、確かな成果をあげている。ここにはまさにペスタロッチーの精神と「教育の原点」が示されていると言えよう。九里茂三氏の長年にわたる多大な功績に対し、第12回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。